

平成二十六年 学力検査問題解説 (国語)

〈出題の方針〉

- 1 国語の基礎的・基本的な内容について、できるだけ広範囲にわたって出題し、国語を適切に表現し、正確に理解する力をみるように努めた。
- 2 文学的な文章と説明的な文章を理解する力をみるように努めた。また、平易な古典を読む基本的な力をみるように努めた。
- 3 作文と言語事項についての問題を出題し、文章表現力や基礎的な言語能力をみるように努めた。

〈出題形式〉

◇ 大問1～大問5の5問構成 () 内は配点	
・ 大問1：文学的な文章 (25点)	
・ 大問2：漢字・言語事項 (22点)	
・ 大問3：説明的な文章 (25点)	
・ 大問4：古典 (12点)	
・ 大問5：作文 (16点)	
合計	100点

大問1

【出題のねらい】

文学的な文章を理解する力をみようとしたものです。

資料文には、家業である林業について関心を持ち始めた喜樹が、祖父やその仲間の木こり職人たちの仕事に触れながら、林業の奥深さや連綿と受け継がれていく山の営みを知り、職業への意識を芽生えさせていく場面が描かれています。場面の展開につれて、変化していく喜樹の心情を読みとることができます。出典は、堀米薫著『林業少年』です。

問1 ^① 楓の^{かえで}声にせつつかれ、喜樹^{きじゆ}も手を伸ばした。とありますが、百年杉に両腕を回していると、きの喜樹の心情を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

- ア 直接百年杉の木肌に触れ、そのたくましさと生命力を体全体で感じている。
- イ かさぶたのような木の皮の、思いのほかしつとりした感触を手の平で感じている。
- ウ 楓と一緒に百年杉に抱きつき、山に対する姉の強い思いを感じている。
- エ 百年以上生きてきた大木が伐り倒されてしまうことに疑問を感じている。

【正答】 ア

【解説】

百年杉に両腕を回した後に述べられている喜樹の心情描写に着目して、その内容が一致する選択肢を選びます。ア～エの選択肢には、本文の叙述を含んでいます。その全部または一部が本文の内容にふさわしくないもの、本文の言い換えとして適切でないものがあります。それぞれの選択肢

をみてみましょう。

まずアですが、喜樹は百年杉に手を回した後、その「太さ」「かたさ」を感じ、その後に「百年以上を生き抜いた証し」を感じとっています。これらを言い換えたものが「たくましさ」「生命力」となります。次にイですが、喜樹が木の皮の感触を手の平で感じているのは、両腕を回す前の場面の描写です。次にウですが、楓が山に強い思いを抱いていることは、このあとの描写から読みとれますが、ここではそれを示す描写はありません。最後にエですが、喜樹が百年杉伐採を、「もったいない」と思う場面が終盤にあります。百年杉との出会いの場面では、それを示す表現はありません。また伐採自体に「疑問」を持つ表現も本文中には見あたりません。したがって、正答はアになります。

問2 喜樹は、思わず息をのんだ。とありますが、このときの喜樹の心情を、次のようにまとめました。空欄(くうらん)にあてはまる内容を、二十五字以上、三十五字以内で書きなさい。(6点)

喜樹は、楓のささやきを聞き、腕組みをして杉を見上げているせいやんの体が、

25-----

35-----

に気づいた。

【正答】 (例) いつもよりもひとまわり大きく見え、百年杉を伐り倒すという仕事の大きさ(三十四字)

【解説】

本文傍線部は、喜樹が楓のささやきをきっかけに、せいやんの高い職業意識や仕事に向かうひたむきな姿勢を感じとり、そこから百年杉伐採という仕事の大きさを改めて理解したことがわかる表現です。読みとりのポイントは、以下の二つです。

- ① せいやんの体が、いつもよりもひとまわり大きく見えたこと。
(「経験を積んだ職人の存在感の大きさ、高い職業意識への気づき」)
- ② 「百年杉伐採」が、そんなベテラン職人にとっても、腕組みをして考え込まなければならぬ、大きな仕事であること。

これらの読みとりをもとに、叙述に即して、指示された字数内でまとめます。

問3 ここからは、せいやんの職人技だなあ。とありますが、「せいやんの職人技」の結果が、最もよく表れている一文を本文中から探し、そのはじめの六字を書き抜きなさい。(4点)

【正答】 百年杉は、木

【解説】

正彦と喜樹の会話から、伐採の際に「ツル」という間隔を残すことで木をつなぎとめ、さらにこの「ツル」の扱いによって木の倒れる方向が決まるのが読みとれます。危険を伴う伐採作業では、ねらった方向に木を倒すことが最重要であり、職人技の見せどころです。ここでは、せいやんが的確に「ツル」を残したことで、百年杉が「ねらったように」「木立の隙間」に倒

れる描写を、職人技の結果として読みとり、それを示す一文のはじまりを書き抜きます。木が倒れる描写はいくつかの文で示されていますが、せいやんの職人技の巧みさが最もよく表れているのは、「百年杉は、木立の隙間を、ちょうどねらったように倒れ込んでいく。」という一文になります。

問4 ^④ ようぞう 庄蔵が、喜樹が思わずもらした言葉を、ぴしやりと打ち消した。とありますが、次は、庄蔵が喜樹の言葉を打ち消した理由をまとめたものです。空欄にあてはまる内容を、三十字以上、四十字以内で書きなさい。(6点)

庄蔵は、人の手で代々作りあげてきた山では、木は 	
30	40
ことを、喜樹にわかって	
ほしいと考えたから。	

【正答】 (例) 伐られたあとも、家具や家の材として生かされ、循環することで山を成り立たせている (三十九字)

【解説】

本文傍線部は、喜樹が発した少年らしい素朴な言葉を、山を知りつくした祖父の庄蔵が打ち消す場面です。その理由は、跡継ぎとなる喜樹に、職人としての木や山に対するもの考え方を伝えたいと考えたからです。庄蔵が本文中で述べている木や山への考え方は、次のとおりです。

① 人の手で作りあげてきた山の木は、伐って使うために育てられていること。

② 伐られること、「死」ではなく、新たな「生」を得ることであること。

③ 木を切って使うこと(＝循環) が繰り返されることで、人の手で作りあげてきた山として価値を持つ (＝山として成り立つ) ということ。

この3点に触れながら、叙述に即して、字数内でまとめます。解答は、「木は」を主語としてまとめることになります。主語と述語の関係にも気をつけて書きましょう。

問5 ^⑤ 急に目の前の山が、ずんと自分におおいかぶさってくるようで、息苦しい感じがした。とありますが、このときの喜樹の心情を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(5点)

ア 喜樹は、百年杉が伐られ、最後の大物がなくなった山を、どうやって育てていくかと、希望に胸をふくらませている。

イ 喜樹は、代々の職人たちの仕事や山に流れてきた時間の長さを知り、山を受け継ぎ育てていくという仕事の重さを感じている。

ウ 喜樹は、庄蔵から跡継ぎとしての期待を受けていたものの、林業について自分から知ろうとしなかったことを悔やんでいる。

エ 喜樹は、杉の伐採作業がいかに危険を伴うかを知り、これまで親しみを感じていた山が、急に遠い存在になった気がしている。

【正答】 イ

【解説】

伐採作業を見学した喜樹は、山の生業なりわいが何代にもわたって続けられてきた仕事であり、十年、百年単位で受け継がれていくことを、庄蔵やきこり職人たちの言葉から学びます。また、「おおいかぶさってくるようで」は、大きな、または重たいものが降りかかってくることの比喩表現です。ここでは庄蔵の目に「跡継ぎとしての期待」を感じとり、その責任の重さを表現したものであると読みとれます。したがって、正答はイになります。他の選択肢もみてみましょう。

まずアですが、傍線部にある「息苦しい感じ」は、期待を持つことの表現ではありません。次にウですが、喜樹が楓や正彦の伐採についての知識に感心している表現はありますが、自分の知識不足を嘆く表現は本文中にありません。最後にエですが、木が倒れるときに、「危険を知らせるアラーム」が心に鳴ったという描写がありますが、山を疎遠に感じている表現はありません。

大問2

【出題のねらい】

基本的な漢字の読み書きや、基礎的な言語能力をみようとしたものです。

問1 次の――部の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に改めなさい。(各2点)

- (1) 厳密な審査を行う。
- (2) 国から県へ管轄を移す。
- (3) 岩かげに魚が潜む。
- (4) 文学作品のヒョウロンをする。
- (5) ヒタイに汗して働く。

【正答】と【解説】

- (1) 「げんみつ」と読みます。「厳」は訓読みで「きび(しい)」「おご(そか)」、音読みで「げん」の他に「ごん(莊嚴)などの読みがあります。「密」は訓読みで「ひそ(か・やか)」、音読みでは「秘密」「密度」などの熟語をつくります。
- (2) 「かんかつ」と読みます。「轄」という字は、「管轄」以外に「所轄」「直轄」など、管理をすることをあらわす熟語に用いられます。
- (3) 「ひそ(む)」と読みます。訓読みとして「もぐ(る)」という読みもありますが、送り仮名や使い方から、いくつかの読みの中から適切なものを選ぶようにしましょう。
- (4) 「評論」と書きます。「物事の価値・善悪・優劣などを批評し論ずること」という意味の言葉です。
- (5) 「額」と書きます。「かく」と音読みすると、「金額」「額面」などの熟語をつくります。また、「額を合わせる」「額を集める」「猫の額」などの慣用表現もあります。
漢字の習得においては、音訓両方について、意味や用法を確認することが大切です。また、複数の読み方がある漢字の熟語の意味を調べると、語句の理解が深まります。さらに、漢和辞典等を使い、漢字が持つ意味や成り立ちにも興味を持って学習するとよいでしょう。
日ごろから文字を丁寧によく習慣を身につけ、漢字の筆順や点や線などに注意して、漢字を正しく用いることが大切です。

問2 次の――部と――部の関係が適切になるように、――部を書き直しなさい。(3点)

私が勉強をするのは、夢をかなえるのに必要な学力を身につけたい。

【正答】 (例) つけたいからだ

【解説】

文の組み立ての関係(係り受け)についての理解を問う問題です。「私が勉強をするのは」という部分を受けるためには、「○○からだ」「○○のためだ」などの理由を表す文末表現が適切です。問題文では、「勉強をするのは……身につけたい」と願望の表現で受けているため、適切でない表現になっています。

問3 次の――部の動詞の活用形が他と異なっているものを、ア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

メロスは起きてすぐ、花婿の家を訪^アれた。そうして、少し事情があるから、結婚式を明日にしてくれ、と頼んだ。婿の牧人は驚^イき、それはいけない、こちらにはまだなんの支度^{したぐ}もできていない、ぶどうの季節まで待つてくれ、と答えた。メロスは、待^ウつことはできぬ、どうか明日に^エしてくれたまえ、とさらに押して頼んだ。

(太宰治著『走れメロス』による。)

【正答】 ウ

【解説】

動詞の活用形の理解を問う問題です。動詞の活用形を見分けるには、主な方法として、

①動詞のあとに続く単語で見分ける。

②動詞の言い切りの形を確認し、「活用の種類」から「活用形」を見分ける。

の二つがあります。まず①の方法で見分けてみましょう。中学校の教科書では、動詞の活用形とそれに続く語として、次のように説明されています。(教科書によって多少内容が異なっています。)

- ・未然形：ナイが続く。ウ・ヨウが続く。
- ・終止形：言い切る。
- ・仮定形：バが続く。
- ・連体形：コト・トキが続く。
- ・命令形：命令の意味で言い切る。

これをア～エの選択肢にあてはめてみると、

ア 訪^レれ(た) ↓「タ」が続く(連用形とわかる)

ウ 待^ツつ(こと) ↓「コト(体言)」が続く(連体形とわかる)

エ し(て) ↓「テ」が続く(連用形とわかる)

となります。イは①の方法では見分けられないので、②の方法で確認します。言い切りの形(ウ段)から「活用の種類」を見分けるには、打ち消しの「ない」を続け、変化した部分(活用語尾)に着目します。

イ 驚^キき ↓驚く(終止形・言い切りの形) + 「ない」 ↓おどろか・ない
↓「か」 ↓ア段の形でつく

「ない」を続けたとき、活用語尾がア段になるのは、五段活用です。これによって、「驚く」は、カ行の五段活用であることがわかりました。これを中学校で学習した活用表にあてはめます。

語例	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
驚く	おどろ	か・こ	き	く	く	け	け

活用表から、イ「驚き」は連用形であることがわかります。「待つ」のみが連体形なので、正答はウとなります。

問4 次の――部と同じ意味で「長」が使われている熟語を、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

彼の長所は、人に親切なところだ。

ア 成長 イ 市長 ウ 延長 エ 特長

【正答】 エ

【解説】

漢字には複数の異なる意味（漢字の多義性）を持つものがありますが、熟語として用いられたときの意味の理解を問う問題です。「長」という漢字には複数の意味があります。漢和辞典で「長」の字を調べると、

ながい、ながく、ながくする、たける、すぐれる、まさるとしかさ、としうえ、おとな、かしら、そだつ

などの意味が載せられています。傍線部と選択肢のそれぞれの熟語の意味を比べてみましょう。

長所：性格や性能などで、特に長じているところ。

ア 成長：人・動植物などが育って成熟すること。育って大きくなること。

イ 市長：町政を統括する長。

ウ 延長：物事の長さや状態などをさらにのばすこと。

エ 特長：特にすぐれたところ。

このうち、傍線部「長所」とエ「特長」は、どちらも「すぐれる、まさる」の意で用いられており、正答はエになります。漢字の意味や成り立ちに興味や関心を持ち、漢和辞典を適切に活用できるようにしましょう。

問5 Aさんの学級では、ことわざや慣用句、故事成語などについて調べ、話し合いを行いました。

次のAさんとBさんの会話を読んで、空欄Ⅰにあてはまる語句を、漢字二字で書きなさい。また、空欄Ⅱにあてはまる内容として最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。（3点）

Aさん 「ことわざや慣用句、故事成語などを調べると、同じ語句がいろいろな言葉の中で使われていることがわかりました。たとえば、『Ⅰ』の道も一歩から、『悪事Ⅰ』を走る、『Ⅰ』眼』などには、同じ語句が使われています。」

Bさん 「本当ですね。Ⅰ』は、非常に（Ⅱ）を表す語句ですが、ことわざや慣用句、故事成語などの中で広く使われているんですね。」

ア 遠い距離 イ 狭い空間 ウ 遠い未来 エ 短い年月

【正答】 Ⅰ 千里 Ⅱ ア

【解説】

ことわざや慣用句、故事成語についての理解を問う問題です。三つの言葉に共通する語句とその意味を答えます。空欄Ⅰには、「千里」という語句が当てはまり、それぞれ次の意味になります。

『千里の道も一歩から』

：遠い旅路も足もとの一歩から始まる。すなわち遠大な事業も手近いことから始まる。

『悪事千里を走る』：悪い行いはすぐに世間に知れわたる。

『千里眼』：遠隔の地の出来事を直感的に感知する神秘的な能力。また、それを持つ人。

これらからもわかるように、「千里」は非常に遠い距離を表します。ちなみに「里」は、距離を表す単位です。単位としてはあまり使われなくなりましたが、ことわざや慣用句、故事成語などで使われています。他にも「千里の馬」（長い距離を走れる馬。才能の非常に優れた人をいう）、「惚れて通えば千里も一里」（ほれた相手の所に通うのは、遠い道のりも短く感じる）などの言葉もあります。伝統的な言葉の組み立てや語源などを知ることによって語彙を豊かにし、日常生活の中で適切に使えるようにしましょう。

【出題のねらい】

説明的な文章を理解する力をみようとしたものです。

本書は、哲学者である筆者が、「哲学の問題は日常私たちに去来する身近な問いに深く関わっている」という立場から、生や死、自己、実在、美など、哲学の主要なテーマを取りあげ、自分自身の思索を紡ぎだすヒントを提供するために書かれたものです。資料文は、言葉の持つ「二つの働き」に着目し、言葉が、私たちが直接経験している事柄を抽象化させる一方で、個々の経験に基づいた「ふくらみ」をもつことで、表現世界が無限に広がることが述べられています。言葉の持つ力を知り、言葉への興味、関心を高めるとともに、論理の展開の工夫や、論理的なものの方や考え方を養うことにつながる文章です。出典は藤田正勝著『哲学のヒント』です。

問1 「空が赤く染まった」^① とありますが、筆者の考えでは、この表現はどのようなことを言い表していますか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

- ア 「私」に「空が赤く染まる」という変化を意識させるということを言い表している。
- イ 「私」が「空が赤く染まる」ということを経験していることを言い表している。
- ウ 「空」に「赤く染まる」という変化が生じたということを言い表している。
- エ 「空」が「赤く染まる」という変化を主観的にとらえるということを言い表している。

【正答】 ウ

【解説】

「空が赤く染まった」という表現について、筆者の考えを読みとり、正しく説明されているものを選ぶ問題です。この問題は、本文中で作者が繰り返し用いている「もの」「こと」という言葉の本文中における意味を理解するための手がかりになっています。それぞれの選択肢をみてみましょう。

まずアですが、筆者は「空が赤く染まった」という表現は、「経験している私が排除される(主体としての「私」が存在しなくなる)」と述べています。よって、「私」に変化を意識させる、と書いてあるアは誤りとなります。次にイですが、これもアと同様に、「私」という存在が書かれているため誤りとなります。次にウは、「私」が排除され、「空が赤く染まる」という変化(＝「もの」にかくかくしかじかの変化が生じた)だけが言い表されるという内容に一致しています。したがって、正答はウになります。最後にエですが、「主観的にとらえる」という記述は本文中に見つけられません。

問2 言葉と私たちの経験、あるいは「こと」とのあいだには積極的な関係もまた存在します。^②

とありますが、筆者がこのように考える理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

- ア 言葉には、ものをグループ分けする働きがあるから。
- イ 言葉は、「こと」を喚起する力をもっているから。
- ウ 言葉は、「こと」をそのものとして表現するから。

工 言葉は、言葉による凝固作用によって変質するものだから。

【正答】 イ

【解説】

言葉と私たちの経験、あるいは「こと」とのあいだには積極的な関係もまた存在する、と筆者が主張する理由が正しく説明されているものを選ぶ問題です。正しい選択肢を選ぶためには、「言葉」と「もの」、「こと」との関係を理解する必要があります。それぞれの選択肢をみてみましょう。筆者は、「言葉」の二つの働きとして、「ものをグループ分けする働き」と『こと』を喚起する力をもっている「ことをあげています。「ものをグループ分けする働き」は、「言葉」と「もの」の関係を示す説明であり、アは誤りになります。もう一つの働きである『こと』を喚起する「は、「言葉」と「こと」の関係を示しています。また「積極的な関係」とは、結論部分の「言葉の喚起機能」が『こと』の世界を切り開く「関係にあることと読みとることが出来ます。これらから、「言葉の喚起力」について述べたイが正答となります。次にウですが、本文中の「もちろん言葉は、……『こと』をそのものとして表現することはできません。」という記述と矛盾するため誤りとなります。最後に工ですが、「言葉による凝固作用」とは、「経験している私の排除」、「言葉による事柄の抽象化」を比喩的に表現したのですが、これらは「言葉」が「ものを区別する働き」の結果であり、誤りとなります。

問3 ③ 私たちの具体的な経験のなかで使われる言葉はすべて、背後にこの「ふくらみ」をもっています。

とありますが、次の表は、言葉と「ふくらみ」の関係を、「日常生活のなか」と「美的な経験の現場」に着目してまとめたものです。空欄ア、ウにあてはまる言葉を本文中から探し、それぞれ二字で書き抜きなさい。なお、同じ言葉を何度使ってもかまいません。(各2点)

		言葉
日常生活のなか	主要な関心の対象になる。	「ふくらみ」
美的な経験の現場	イ □ になる。	ウ □ になる。

【正答】 ア 剰余 イ 剰余 ウ 主役

【解説】

言葉と「ふくらみ」の関係を、対比される二つの場面に着目してまとめた表の空欄に、本文中から適切な言葉を補う問題です。正答に導くためには、本文中のキーワードである、言葉のもつ「ふくらみ」が、どのような場面で、どのような役割をもつかを理解する必要があります。正答の根拠となる部分を示しておきます。

(本文七頁、三八行目)

…私たちの日常の生活のなかでは、その「ふくらみ」がつねに主要な関心の対象になるわけでは
ありません。それは多くの場合は「剰余」にすぎません。しかし、美的な経験の現場では、
むしろそのほうが主役となり、言葉のほうが「剰余」になります。

問4 ④ とくに俳句や短歌はごくわずかの言葉しか使いませんが、それを読む人のうちに限りない「こと」を喚び起こし とありますが、次は、この内容を松尾芭蕉の句を使って説明したものです。空欄にあてはまる内容を、四十五字以上、五十五字以内で書きなさい。(6点)

「行春ゆくを近江おうみの人とおしみける」という句の中で、

55	45			

ということ。

【正答】 (例)「近江の人」という言葉を使うことにより、句を読んだ人に近江の春の具体的な情景を思い浮かべさせている(四十九字)

【解説】

俳句や短歌で使われた言葉が、読み手に「限りない『こと』を喚び起こす」ということを、本文中の松尾芭蕉の句を使って具体的に説明する問題です。芭蕉の「行く春を」の句について説明した段落(八頁、十四行目〜二十六行目)を読み、「この句を読んだ人が『近江の人』という言葉を軸にして、いま述べたような情景をありありと思い浮かべること」というキーセンテンスに着目します。ここから、芭蕉の句においては、「言葉が『こと』を喚び起こす」とは、「近江の人」という言葉が、読み手に「ある情景」を思い浮かべさせることである、とわかります。この「ある情景」が指すものを本文中からまとめ、叙述に即して、指示された字数内でまとめます。

問5 本文に書かれている内容と違うものを、次のア〜エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(5点)

- ア 言葉に事柄の抽象化が伴うのは、言葉は私たちが直接経験している事柄を一つの枠のなかに押し込めて表現するからである。
- イ 言葉で、あるものの美しさを伝える場合、「ふくらみ」を共有するかないかで、伝わり方は異なる。
- ウ 経験と言葉のあいだには大きな隔たりがあるが、詩歌の世界では「ふくらみ」を手がかりにして、その隔たりを超えることができる。
- エ 日常用いられる言葉を活かして「もの」のイメージをつくり、新しい意味づけを行っているところには詩の力がある。

【正答】 エ

【解説】

本文において、筆者が述べた内容と違う選択肢を選ぶ問題です。正答の選択肢を選ぶには、本文の論理展開に沿って、筆者の考えを確かめていく必要があります。それぞれの選択肢をみてみましょう。

まずアですが、「言葉は、私たちが直接経験している事柄を、一つの枠のなかに押し込めて表現

します。そのために言葉には必ず事柄の抽象化が伴うのです。」という記述が本文中にあり、正しい内容です。次にイですが、『「ふくらみ」を共有する人……その美しさを伝えることはできません。』とあり、正しい内容です。次にウですが、「経験と言葉とのあいだに隔たりが生じてしまいます。」また「経験と言葉のあいだには……この間隙^{かんげき}を飛び越えることができず。」とあり、正しい内容です。最後にエですが、詩の力が「もの」のイメージをつくる、という記述は本文中にありません。また、この文章の主題は、詩や短歌に代表される「言葉」が、「こと」（経験）を喚起し、世界を切り開くことであり、「もの」への働きかけにはふれていません。したがって、正答はエになります。

大問 4

【出題のねらい】

古典を理解する基本的な力をみようとしましたものです。難しい語句にはその左側に口語訳を付け、理解しやすいように配慮しました。歌によって神仏や人々の心を動かし利益を得る説話（「歌徳説話」といいます）を読むことで、古典に表れたものの見方や考え方を読みとる力をみます。出典は『俊頼髓』です。

問 1 傍線 A ～ C の主語の組み合わせとして正しいものを、次の A ～ E の中から一つ選び、その記号を書きなさい。（3点）

ア	A	実綱 <small>さねつな</small>	B	能因法師 <small>のういんほふし</small>	C	能因法師
イ	A	実綱	B	実綱	C	能因法師
ウ	A	能因法師	B	実綱	C	実綱
エ	A	能因法師	B	能因法師	C	実綱

【正答】 イ

【解説】

日本語では、主語を省略した文章が書かれることがよくあります。古文においてもそれは同様です。古文の学習においては、主語（動作主）を確認しながら本文の内容を押さえていくことが大切です。この本文では、伊予の守である実綱と、「歌好む者」である能因法師の関係とそれぞれの立場を理解し、意味のまとまりごとに、動作主を丁寧に確認していきましょう。

問 2 ① 祈りさわぎけれど とありますが、ここではどのようなことを祈っているのですか。次の空欄にあてはまる内容を書きなさい。（3点）

こと。

【正答】 (例) 雨が降ること

【解説】

本文中の「祈りさわぎけれど」の内容について、叙述に即して説明する問題です。物語の展開を本文中の表現からおさえていきます。まず「いかにも雨降らざりけり。」とあり、続いて実綱が能因法師に「雨祈れ」と命じていることから、伊予の国が干ばつに悩まされていることがわかります。その後、能因法師が歌をよむと、「おほきなる雨降りて」とあるので、これらから「祈り」の目的が「雨が降ること」にあることがわかります。これを、空欄にあてはまるように解答します。

問 3 ② わづらひて とありますが、この部分を「現代仮名遣い」に直し、ひらがなで書きなさい。（3点）

【正答】 わずらいて

【解説】

「歴史的仮名遣い」についての理解を問う問題です。中学一年生から繰り返し学んでいる学習内容です。基本的には、「は行」を「わ行」に置き換え、「ぢ」を「じ」に、「づ」を「ず」に置き換えます。歴史的仮名遣いは音読を通して体感的に身につけましょう。

問4 次は、この文章を読んだあとの先生とSさんの会話です。空欄にあてはまる内容として最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

Sさん 『古今和歌集』の冒頭には、『やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。』と書かれていましたね。」

先生 「そのあとに、和歌は、目に見えない神々の心を動かし、男女を親しくさせ、勇猛な武士の心もやわらげる、と述べられていますよ。」

Sさん 「そうですね。『古今和歌集』の冒頭もこの文章も、 について述べている点が共通しているんですね。」

ア 和歌の伝統 イ 和歌の心情 ウ 和歌の起源 エ 和歌の効用

【正答】 エ

【解説】

「俊頼髓脳」と「古今和歌集」の冒頭を読み比べ、二つに共通するものの見方や考え方について読みとらせる問題です。どちらの文章も、和歌が神仏の心を動かし、利益をもたらすことが述べられています。このような考え方を示す語句として、最も適切なものを選びます。それぞれの選択肢をみてみましょう。

まずア「和歌の伝統」ですが、「伝統」とは「長い歴史を通じて培い、伝えてきたもの」です。次にイ「和歌の心情」ですが、「心情」とは「心の中の思い、気持ち」です。次にウ「和歌の起源」ですが、「起源」とは「根源、物事の起こり」です。最後にエ「和歌の効用」ですが、「効用」とは「役に立つこと、ききめ、効能」です。このうち、先ほどの「和歌が利益をもたらす」という内容に最も適しているのは、「和歌の効用」です。したがって、正答はエになります。

なお、「和歌の効用」という語句は、古典で和歌を説明するときによく用いられます。「百人一首」などの和歌にふれることで、日本の伝統文化に対する興味や関心を高めていきましょう。

【出題のねらい】

「働く理由」に関する県内の高校生を対象とした調査結果から、「働くこと」についての自分の考えが相手に効果的に伝わるよう、自己の体験をふまえ、展開を工夫して書く力をみようとしたものです。文章をまとめるにあたり、示された資料から読みとった材料をもとにすることが指示されています。

【解説】

まずは「働く理由」の資料から、調査対象の高校生の「働くこと」への考えを読みとります。そのうえで、資料の読みとりによって気がついたことや、「働くこと」について、普段から考えていたことなどをまとめます。その際に、根拠となる体験をあわせて考えます。ここで、書き手のもの見方や考え方が表れます。今回は、身近で働いている人から聞いた話や、中学校での職場体験学習などを取りあげて、意欲的に書いているものが多かったようです。社会のできごとに関心をもち、多くの体験をすることで、視野を広げることが出来ます。

次に、文章の形態や構成を考えます。問題文の注意(1)では、段落や構成に注意して書くように指示されています。この段階で、構成メモなどをつくっておくと、文章の柱がぶれたりしません。また、見直しや推敲(たきあ)がしやすくなります。

次の段階は記述です。自分の意見を述べるときには、自分の立場を明確にして、論理の筋道が通るように記述することが大切です。筋道を立てて書くこと、自分の意見を相手に説得力をもって伝えることが出来ます。具体的には、次の点に留意しましょう。

- ① 自分の考えや判断の根拠(理由)を明確にする。
- ② 根拠(理由)は、客観性や信頼性の高いものを選ぶ。
- ③ 最初から最後まで、自分の立場がぶれない(自分の意見が揺れない)ようにする。
- ④ 本の内容や他から聞いた言葉などを含む場合は、適切に引用する。
- ⑤ 論理の展開を工夫し、順序立ててわかりやすく説明する。

理由をあいまいにしたり、体験の内容が意見とずれていたりと、途中で「どちらとも言えない」というように立場がぶれてしまうと、説得力が弱い文章となってしまいます。意見・根拠(理由)・体験が一貫していることが大切です。また、「論理の展開」については、初めに自分の意見を述べ、それを裏づける事実(体験)を述べたうえで、具体的な事実(体験)を一般化すると、自分の意見の正当性や妥当性を示すことが出来ます。他の人の言葉などを引用するときには、「」でくくったり、出典を明示すると、信頼性が高まります。記述に際しては、対象となる事柄を順序立ててわかりやすく説明しましょう。

また、注意(3)に、「原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。」とありますが、句読点、符号、改行など、原稿用紙の使い方に従って文章を書き、書いた文章を推敲する習慣を身につけることが大切です。普段から、文章を書く際に、学習した漢字を正しく用いて丁寧に書く習慣を身につけるようにしましょう。

説得力のある文章を書くには、説明したい内容を端的に表す言葉や接続語などを適切に使えるということも大切です。論理的な文章を読んだり、客観的な説明を聞いたりする学習活動を大切にしましょう。答案の中には、話し言葉をそのまま書いたり、常体と敬体が混じったりしているものがありました。相手や目的に応じた、適切な表現を心がけましょう。そのためには、日ごろから、読み手を意識して、わかりやすい文章にしようという心がけることが大切です。また、書き上げたあとには必ず読み返して、自分の文章を確認しましょう。